

# 在日朝鮮人の民族運動における文化闘争と闘争文化 —1920年代中盤から1930年代初めまで—

金仁徳 KIM In-duck

韓国国立中央博物館 *National Museum of Korea*

- I. 序
- II. 在日朝鮮人の形成
- III. 前衛(文化)団体の組織と文化闘争
- IV. 演劇団体の文化闘争
- V. 多様な闘争文化
- VI. 結

## I. 序

植民地民として渡日した在日朝鮮人は、他の民族の渡日と定着の歴史と区別される。そして生存の方式も異なった。彼らは生存と闘争の歴史を被差別の中で創出した。彼らの文化は支配者の歴史の中でそれほど話されてはいない。日本の警察の資料にさえ、多くの紙面を割愛されずにいる状態であった。それは日本当局が在日朝鮮人を統制と‘同和’の対象としてだけ考えたためであった。

在日朝鮮人の文化、民族運動、在日朝鮮人の文化闘争は朝鮮文化と朝鮮人の民族運動が変化したものであった。このような変化は文化受容を通して行われ、その速度は政策的な統制下でも、それほど速くはなかったようである。<sup>1</sup>しかし、時間が経つにつれて変化の様相は多様になり、生活の中ではより明らかになった。

本稿は、在日朝鮮人の歴史の研究で注目されなかった在日朝鮮人の民族運動の中で、1920年代中盤から30年代初めまでの団体の文化闘争、闘争文化について考察しようと思う。この研究は制限的な資料と最近の重要な文化関連先行研究を参照しながら、<sup>2</sup> 作成しようと思う。

## II. 在日朝鮮人の形成

戦前に朝鮮人が日本に行くことは、新しい生の出発であった。それを日帝は徹底して統制し、積極的に活用した。朝鮮総督府の渡日政策は集団的な労働者管理を目標とし、段階的に施行した。

渡日した朝鮮人は1920、30年代に多かった。したがって日本に居住する朝鮮人の人口が急増した。この時、渡日者が急増したのは、朝鮮経済の困難が作用したからである。勿論、劣悪な就業環境も無視できない状態であった。1930年代中期から在日朝鮮人の場合は、鉱工業部門の従事者が増加し、不安定な臨時的な各種雑業、肉体労働、零細工場に従事する人が増えた。したがって日雇い労働者が全体の職業分布の中で最も多い部分を占めるようになった。日本当局はこれらの朝鮮人の弱点として、1つの場所に長く安着できず、お金を多くもらおうと他の場所にいつでも移って行くという事実を指摘している。そして仕事において、熟練度が落ち、使用主が信用できなくなるという。<sup>3</sup> このような視覚は徹底して使用者の視覚で、朝鮮人の渡日の本質的な理由と在日の意味に対する偏見から出てきた、間違った視覚であった。

一方、少数だが、公務員、銀行員、学校の教師、新聞社及び雑誌社の記者、医師、弁護士の渡日もあった。<sup>4</sup> 勿論、彼らが日本内で似た職種に就業したかは宿題である。

以上のような在日朝鮮人労働者の一般の生活状態は、日本人労働者の中では最下位に属した。都市の自由労働者の生活状態と比較してみても、それ以下で、悲惨、そのものであった。<sup>5</sup>

日本政府の政策的な次元から見る時、問題は在日朝鮮人が怠惰であり、非衛生的で知識が低級であり、賭博癖があるという考えであった。<sup>6</sup> したがって彼らの生活と文化は政策的な次元から‘指導と同和’の対象であった。特に、朝鮮人児童の問題に注目し、未就学児童の防止に努力する姿も見える。<sup>7</sup>

渡日した朝鮮人は集団的な居住地である朝鮮村を作った。このように朝鮮人たちが朝鮮村を形成するようになった理由は、朝鮮人たちの大多数が日本語に熟練できず、日本人居住地域で住宅を得ることができなかったためであった。そして職業の大部分が自由労働者で、密集地域で朝鮮人同士の就業斡旋が簡単で、朝鮮人たちの収入では日本人居住地域で生活が不可能だったためであった。<sup>8</sup> 朝鮮村の形成は低賃金と厳しい民族差別の中で生計を維持していくための手立てであると見ることができる。

1920年代の場合、時間が経つにつれて、村の中には朝鮮飲食店<sup>9</sup> や食材料店ができ、朝鮮語だけで十分に生活が可能になった。1930年代には工場の

職工としてや、店員としてお金を集めて工場を構えたり、商売を始めた。<sup>10</sup>

ここ、朝鮮村は児童たちが朝鮮語や朝鮮の歴史を自由に習う教育の場であった。朝鮮村を巡回する商人を通して手に入れた朝鮮語の小説や古典小説を回しながら読むことは単純な娯楽に終わらず、故国の歌手の巡回公演や朝鮮語の演劇公演も彼らにとってはよい教育の手段になった。

1930年代後半には日本政府によって衣服・飲食・生活習慣・冠婚葬祭等において日本化が、より積極的に強要された。戦時下の強制的な政治体制を考えると、これと反対に朝鮮文化を維持することが困難だったのは簡単に理解できる。<sup>11</sup> しかし、独自の朝鮮文化が朝鮮人集団居住地において維持されたことも否定できないことであろう。資料上でだけ表現されているが、大体、朝鮮人は日本女性との結婚を好み、日本渡日の理由がここにある場合もあったという。日本当局は‘内鮮融和’の最高の方法としてこれを考えた。<sup>12</sup>

### Ⅲ. 前衛(文化)団体の組織と文化闘争

在日朝鮮人の文化活動(=文化闘争)は団体を通して継続されたことが注目される。<sup>13</sup> このような団体(前衛)は民族運動の性格を帯びながらも、出版や演劇等の文化活動を通して反日闘争を先導した。このような文化活動は学生・青年たちを中心に展開されたが、注目されるのはカップ<sup>14</sup> 東京支部である。この組織の演劇部は在日朝鮮人演劇運動を主導したが、巡回公演を通して民族運動を先導した。<sup>15</sup> このカップ東京支部演劇部が在日朝鮮人を対象にした演劇のうち、注目されるのは1927年10月29日午後6時、上野公園自治会館で開かれた公演であった。<sup>16</sup> この公演は在日本朝鮮労働総同盟東京朝鮮労働組合主催で新幹会東京支会と各社会団体が後援したが、東京地方朝鮮労働者慰安会として開かれた。無料入場で始まったこの日の公演は定刻から大満員で、1・2・3部で行われた。公演は1部でまず朝鮮短歌独唱等があり、2部では洋琴、絃琴合奏等があった。そして3部はカップ東京支部演劇部が出演して、シンクレア(Sinclair)の‘二階の男’を上演した。一方、公演後には感想会が開かれ、組合員が熱弁を吐いた。以後、大衆の中でこの集まりを労働者大会に転換しようという発議があり、これが可決され在東京朝鮮労働者大会が開かれた。<sup>17</sup> この集まりは事前に準備があったかのように、2階から朝鮮暴圧政治反対同盟の宣伝ビラがまかれたのだが、すぐに警察の検束で集まりは解散されてしまった。<sup>18</sup> 1929年2月17日にも東京三多摩労働組合慰安会でカップ東京支部演劇部はシンクレア作‘二階の男’、グレゴリー(Lady Gregory)作‘月出’を公演した。<sup>19</sup>

カップ東京支部は以後、無産者社<sup>20</sup>に発展した。無産者社は1929年5月合法出版社として金斗鎔、李北満、成耆伯等が主導して組織した。<sup>21</sup> ここには1929年11月、カップ東京支部が解体解散を宣言して加入した。この組織は『無産者』を機関誌として定め、機関誌の内容は高景欽、金三奎、金致廷の3名が協議して掲載することに決定した。李北満、金三奎が編集責任者になり、無産者社のパンフレットを発行し、文献は朝鮮と日本地域に配布された。<sup>22</sup>

一方、無産者社の後身として‘労働芸術者準備会’‘労働階級社’‘同志社’等があった。このうち、労働階級社は組織の目的通り東京で出版活動を遂行した。労働階級社が東京に存在するようになったのは出版活動の容易さのためであったが、具体的な理由は次のように整理することができる。<sup>23</sup>

一つ目に、日本帝国主義の暴圧で朝鮮では文化的領域まで完全に封鎖されていたが、日本は合法空間が開かれていた。例を挙げると、朝鮮ではメッセージ1枚も読めず、ピラ1枚に懲役3年を言い渡し、漫画を描いて日本帝国主義を馬鹿にした子供を極刑に処する状況であった。しかし、日本では革命的出版物が洪水のように大衆に流入されていた。

二つ目に、朝鮮では文書活動及びプロレタリアートの文化活動が大変不十分であったのに反して、日本はドイツと共に資本主義列強の中で、プロレタリアート文化闘争と文書活動が活発に展開されていた。

三つ目に、朝鮮では原稿検閲制度を実施して、日帝が革命的原稿を没収、削除し、ここを通過できないと出版できなかった。しかし、日本では納本制度であるため、出版のための状況が全く違った。

四つ目に、日本は海外の他の地域よりも配布、通信が容易であった。当時、朝鮮では出版物を刊行するのに、地理的關係が大変不利なだけでなく、利用することができる印刷物がほとんどなかった。これに反して東京は、地理的關係及び条件によって出版活動を遂行することができた。

ところで、同志社の場合は1931年11月結成された。このうち、演劇部門はカップ演劇研究会が改称した東京朝鮮語劇団<sup>24</sup>が主導した。東京朝鮮語劇団は移動劇場の形式で活動を始め、1931年11月23、24日には築地小劇場で公演を持つと、‘下車’‘盗賊’‘森林’等をレパートリーに選んだ。そして1932年1月以後には土木労働者集會に移動公演、小公演を持った。

一方、1930年10月、プロフィンテルン第5回大会宣伝煽動協議會が「プロレタリア文化・教育組織の役割と任務に関する体制」を発表すると、日本の進歩的芸術団体は同じ年の11月に日本プロレタリア文学連盟（KOPF）として新しく創立・統合された。<sup>25</sup> そうかと思えば、KORF中央協議會書記局は1932年2月、朝鮮協議會<sup>26</sup>設置を決定し、在日朝鮮人労働者を文化を通して獲得することを主要な活動の目標とした。

#### IV. 演劇団体の文化闘争

本格的な演劇団体を通じた朝鮮人の文化活動を見ると、まず取り上げることができるのが、日本プロレタリア演劇同盟東京支部所属の3・1劇場である。<sup>27</sup> 3・1劇場は1931年6月に組織された‘東京朝鮮プロレタリア芸術研究会’が10月に‘朝鮮語劇団’として発展し、1932年2月、日本プロレタリア演劇同盟に加盟すると同時に3・1劇場として改称された朝鮮人の劇団である。加盟当時の会員は20名余りで、委員長は李洪鍾であった。結成以後、3・1劇場は国際労働者演劇デイに派遣するための東京地方コンクールに参加し、移動公演を活発的に展開した。<sup>28</sup> 3・1劇場以外にもスコップ劇団、名古屋革新劇団、京都朝鮮語劇団準備会等の活動があった。これらの劇団の特徴は朝鮮人居住地域を訪ね歩きながら、演劇を上演していた事実である。彼らの活動によって1932年と1933年に東京・大阪・九州・京都・名古屋等の朝鮮人密集地域で朝鮮協議会が主催する朝鮮語演劇が上演された。

資料上、確認される3・1劇場の公演を見ると、まず前述した1932年国際労働者演劇デイ（2月14日-23日）で朝鮮語演劇として‘荷車’を舞台に上げた。1933年2月23・24日、3・1劇場は築地小劇場で開かれた‘労働者素人演劇大会’と2月25・26日、‘極東民族演劇の夜’を主催して、‘飢えた日’‘叫べ中国’を持って参加した。<sup>29</sup> 同じ年の12月6・7日に築地小劇場で開かれた汎太平洋革命演劇交換週間記念公演を目的とする‘朝鮮演劇の夜’行事では‘江南の燕’‘砲艦コックチャペル’を上演した。2日間の公演に956名が来て、このうち、90%が朝鮮人であった。<sup>30</sup>

1934年2月15日、芝浦会館で3・1劇場は‘在京朝鮮人慰安の夜’‘飼豚’‘万頃村’と5月25日・26日、築地小劇場で‘貧民家’‘アヘン戦争’等を上演した。<sup>31</sup> 1934年9月、プロットが解散するようになると、3・1劇場は「プロットの解散後、私たち3・1劇場の新しい出発に臨んで」を発表して、純粋な演劇芸術者集団として、また在日朝鮮人民族演劇の先頭として、‘高麗劇団’として再出発した。<sup>32</sup> そして崔丙漢と金善洪は1935年2月に別途に‘東京新演劇研究会’を結成した。<sup>33</sup>

そうかと思えば、1935年5月、東京新演劇研究会に参加しなかった金斗鎔、金波宇等は純粋な興行劇団の創立を準備して、準備過程で5回に渡って公演をし、朝鮮芸術座を結成した。朝鮮芸術座が舞台に上げた公演作品は‘ウルルド’‘普通学校先生’‘飲み屋’‘ソウルの屋根の下（原題：貧民家）’等であった。そして公演場所は芝浦会館、王子区宮仲俱樂部等の地であった。<sup>34</sup>

一方、朝鮮芸術座の創立公演を知らせる文件は、公演する作品として‘鼠

火’（3幕7場）と‘トソンナン’（1幕）を載せ、簡単な作品解説と作品の文学史的な意味を広く紹介している。午後6時半から公演は始まり、会員権は青：1円、白：0.5円で、販売所は神田三省堂と朝鮮食堂等の地であった。当時も後援は東亜日報、朝鮮日報東京支部で行った。<sup>35</sup>

1936年に3・1劇場は地区公演として柳致真原作‘牛’、韓秉泰の‘トソンナン’を公演した。<sup>36</sup> ‘牛’ ‘トソンナン’を1月29日、浦田谷劇場で、そして同じ月の30日、神奈川鶴見岩戸館で、同月31日、神奈川玉川高津館で、2月4日、芝浦青年会館で公演した。<sup>37</sup>

ところで、3・1劇場の一員であった東京朝鮮人留学生は3・1劇場の解散以後、1934年6月24日、会員相互間の総合的、芸術的研究と朝鮮訪問公演及び日本で朝鮮郷土芸術を紹介するという等の規約を定め、‘学生芸術座’を結成した。この学生芸術座は「朝鮮の新劇樹立は創作劇から」というスローガンの下、1935年6月4日には築地小劇場で‘渡し舟’ ‘牛’を上演した。そして1937年6月22、23日には‘春香伝’を、1938年6月4、5日には‘地平線’ ‘平原’を公演した。合わせて1939年には‘門’ ‘幽明’を準備したが、‘門’が公演禁止になり上演できなかった。

以上のように、日本プロレタリア演劇同盟東京支部所属の3・1劇場が解散した後、在日朝鮮人たちの演劇活動は東京で東京新演劇研究会、朝鮮芸術座、そして学生芸術座、高麗劇団等によって展開された。<sup>38</sup> 一方、一部の学生芸術座団員たちは日本大学芸術科の学生たちと共に‘形象座’を結成したが、<sup>39</sup> 特別な活動は確認されなかった。

今まで調べてみた演劇活動は、大衆の意識提供と民族意識の高揚に寄与した。これと共に在日朝鮮人の啓蒙と文化向上、そして民族・階級的覚醒のために一部の先進的な朝鮮人は新聞を通して文化闘争を展開した。特に注目されるのが『民衆時報』と『朝鮮新聞』の役割であった。

大阪で1935年に創刊された朝鮮語の新聞である『民衆時報』は、大阪地域の朝鮮人の求心体としての役割を担った。発刊当時の代表幹事が金文準であった。『民衆時報』は発行趣旨文で‘日本関西地域に居住する30万の朝鮮人の独自の言語機関として’の使命を果たすことを明らかにし、発行趣旨文と共に発表された綱領では、主に生活改善と文化的向上に目的を置いていた。<sup>40</sup>

『民衆時報』の内容を分析してみると、<sup>41</sup> 当時の主な記事の内容は渡日制度、人権を無視した警察の取り締まり、雇用及び住宅差別等であった。特に『民衆時報』は政治的立場を反映して矯風会の行政的な統制に批判を加えた。具体的に内容を見ると、在来の服を捨て衣服を変えるというのは経済的に不可能であるにも関わらず、御用団体が強制することは奇想天外な政治的現状で

あったという。<sup>42</sup> 朝鮮民族がいる場所は朝鮮の精神があり、朝鮮人の感情と共に衣服は朝鮮の服であったという。これと共に定住朝鮮人の生活圏を擁護、半封建的遺習撤廃と共に、朝鮮語教育を強調した。1936年1月1日付では「各界人士の年頭所感」という紙面で李民善と金善嬉は「ハンゲルを守ろう」と「子女には朝鮮文と朝鮮語を」という文章を通して、国語教育の必要性を指摘して実践を求めた。<sup>43</sup>

『朝鮮新聞』は1936年2月に東京で発行され、代表は李雲洙であった。ここでは国際関連記事も扱っており、当時の在日朝鮮人の生活の様子を具体的に言及する記事を多く取り扱っている。<sup>44</sup>

## V. 多様な闘争文化

在日朝鮮人は1910年、日韓併合と共に革命的な思考を実践に移し始めた。まず取り上げられるのが思想団体である。このうち、注目される組織が北星会である。北星会は黒涛会が分会し作られたのだが、組織員たちは朝鮮内で巡回講演会を開催して、土曜会、北風会等を作った。これと共に北星会の後に続き、一月会が組織された。一月会の構成員は大衆団体の幹部を兼ねながら組織を指導した。彼らは政治運動だけをしなかったであろう。組織の強化と階級意識の高揚、反日思想の鼓吹に重点を置いた。そして宣伝活動を通して組織員の獲得と党勢の拡大に努力した。<sup>45</sup> 示威はその一つの方法であった。

では、在日朝鮮人の示威文化はどのような内容を説明できるだろうか。まず、闘争文化の先導であった歴史的イベントとして2・8独立運動を通して、その内容を見てみよう。この運動は学友会と朝鮮青年独立団等、留学生団体が主導したが、<sup>46</sup> 朝鮮青年独立団は1919年2月7日、東京のある印刷所で「民族大会召集請願書」を日本語で1,000部印刷し、「宣言書」と「決議文」は英文で600部を謄写して、2月8日の朝10時、東京にある各国大使館と公使館、日本政府と国会議員及び朝鮮総督府、そして各新聞、雑誌社へ送った。午後2時、東京基督教青年会館で学友会役員選挙を名目に留学生大会を開催し、歴史的な独立宣言式を挙行了。そうして600人余りの留学生たちの熱狂的な支持の中で、歴史的な「2・8独立宣言書」が発表された。しかし、管轄警察署によって強制解散され、実行委員10名等、27名が出版法違反で実刑を言い渡された。東京の留学生たちは「2・8独立宣言書」で朝鮮の悠久な自主独立国の歴史を強調し、朝鮮独立の正当性を主張した。そして日帝の韓国併合が朝鮮民族の意思を無視した軍国主義的野心と暴力によるもので

あったことを糾弾した。日帝の国権侵奪とこれに対抗した独立運動の理由及び日帝の奴隸的統治政策を批判して、独立と自由に向かった朝鮮人の独立運動が継続されるであろうことを明らかにした。最後に朝鮮民族の独立国家は民主主義に立脚し、世界平和と人類の文化の発展に寄与するようになるだろうことをはっきりと明らかにした。<sup>47</sup>

街頭闘争の形態の示威文化としては1928年8月29日の午後、約150名の朝鮮人労働者と留学生たちが東京武蔵屋百貨店の横の空き地で革命歌を歌ってビラを配り、道を行進した事件を挙げることができる。この時、「国恥日（8月29日）に臨んで、全朝鮮2300万の同胞は一斉に武装して一大暴動を起こそう」という檄文が配られた。<sup>48</sup> ここでは国恥日の意味を再考すると同時にドイツとロシアの革命勢力の団結を強調する等、国際連帯を披瀝した。

もうひとつの示威文化としては、監獄で野獸的な日帝の弾圧にも関わらず、獄内闘争があったことを取り上げることができる。金天海は監獄でそれぞれの記念日を迎え、契機闘争を行ったのだが、1930年3・1運動記念闘争、メーデー闘争等がそれである。金天海をはじめとした反日闘士たちは看守たちの目を盗んで、万歳を叫んだ。そして『監房新聞』を発刊して理論的に武装して宣伝・煽動を図った。<sup>49</sup>

そうかと思えば、各種の集まりは在日朝鮮人にとっては反日闘争の場であった。国内の講演会をはじめとして、陸上運動会・演説会・卒業祝賀会・雄弁大会等を通して学友会は朝鮮の独立と階級解放を大衆的に宣伝して、組織の強化を図った。特に学友会は朝鮮内に持続的に講演団を派遣して講演会を開催し、大衆的な宣伝・煽動活動を展開した。1920年からは総7回に渡って留学生講演団が国内に入ってきて、講演者は主に学友会の幹部が担った。そして列車線によって講演団の構成員を選任して地域を巡回しながら、講演を行った。<sup>50</sup>

在日朝鮮人は反日闘争を記念日を通して実現した。在日朝鮮人は国内と異なり、民族的問題を実感しながら暮らしていた。したがって、ある契機が与えられると、その凝集力が国内よりはるかに強かった。記念日はまさにこのような朝鮮人にとって闘争の日であった。戦前、在日朝鮮人は団体を中心として多数が組織化され、活動した。代表的な在日朝鮮人の大衆の団体である在日本朝鮮労働総同盟は多様な記念日闘争を展開した。特に傘下の東京朝鮮労働組合、大阪朝鮮労働組合、三多摩朝鮮労働組合、兵庫県朝鮮労働組合、東京朝鮮労働組合北部支部等は他の労働組合より積極的であったようである。<sup>51</sup> これらの労働組合は地域の独自性を維持しながら、記念日闘争を展開したが、時々刻々と変わる情勢に対応して大衆を先導した。在日本朝鮮青年同盟の場合も、機関誌『青年朝鮮』を通して見ると、国恥日・国際青年デ



イ・関東大震災の日・間島共産党公判等を闘争として積極的に牽引しようとした。特に、咸興高普の盟休事件があると、植民地教育の本質的な問題を指摘して民族差別の教育の撤廃を主張した。

在日朝鮮人の民族運動団体が主導した主要記念日は1920年代の場合、3・1記念日、メーデー、国恥日、関東大震災の日、6・10万歳記念日、反戦デイ、国際無産青年デイ等があった。<sup>52</sup>

元々、3・1運動は全民族運動として、以後各種の記念日闘争に参加したすべての集団にとって大事で、大変印象的な事件であった。したがって、その歴史上は速い速度で政治的影響力を拡大していったが、日本で3・1運動記念日闘争は1919年以後、ほとんど毎年開かれた。<sup>53</sup> 特に、1927年の3・1運動記念日闘争は朝鮮人団体協議会の主導で開かれ、組織的強化が積極的に図られた。以後、1930年代からは運動の方向転換と連動して3・1運動記念日闘争が朝・日共同闘争と支援闘争に変わって行った。1930年には在日本朝鮮労働総同盟が全協として解消される過程にあったため、3月1日を迎えては新聞と団体が朝・日共同闘争と支援闘争を先導する内容として一貫している。<sup>54</sup>

1931年には2月下旬から日本反帝同盟、日本労働組合全国協議会等は「3・1記念日を歓談会、職場大会、サボタージュ、怠業として闘え」という標語を掲げ先導した。大阪の場合、吉川製靴工場では2月23日から争議が進行中であったが、争議団では3月1日を記念して100名の労働者が動員され、工場を襲撃しようと準備していたが首謀者が検束された。兵庫県では2月28日、全海建が「3・1記念懇談会」と称して闘争を模擬したが検束された。

もうひとつの重要な記念日であるメーデーも在日朝鮮人にとって絶え間ない闘争の場であった。そしてまさに日本人との連帯の場であった。本格的に在日朝鮮人がメーデー集会に参加したのは1922年であった。この日、集会は日本労働総同盟が主催したのだが、<sup>55</sup> ここには宋奉禹、白武をはじめとして、黒涛会の会員30名余りが参加した。<sup>56</sup> 以後、在日朝鮮人は団体と個人資格でメーデーを記念した。1926年、メーデーと関連して、日本警察は東京の場合、在日本朝鮮労働総同盟側の260名、大阪の参加団体10組合、400名、堺市150名等が参加したと推算している。<sup>57</sup> 特に1927年、メーデーを迎えて、金熙明はメーデーの歴史を整理しながら、同時に植民地民族を解放させるのはプロレタリアートの合同の任務であることを明らかにしながら、「植民地即時解放」の旗を掲げようとした。<sup>58</sup> 1930年、メーデーの時は大阪朝鮮労働組合がメーデーの特別講座を開き、行事参与を積極的に勧誘した。

## VI. 結

近代以後の民族と民族文化はある固有のものではなく、歴史的な発展過程で社会的要求によって形成された象徴的構成物という認識はそう困難な談論ではない。特に民族と民族文化が民族国家の成立という現代国家の形成と関連しているという認識は文化と政治を分離する視覚の誤りを克服できるようにしてくれる。多様な人種や種族、そして彼らの多様な固有の文化にも関わらず、同質的なひとつの文化、いわゆる民族文化として統合される過程は民族の形成過程でもあるが、民族国家という政治的機構と民族経済という経済的制度の形成過程でもあった。

戦前、植民地民として存在した在日朝鮮人は政治・経済的な困難の中でも多様な闘争を展開した。彼らの闘争は単純な大衆文化的様相を帯びたものから政治的性格を帯びたもの等、存在位置によって日本と出会った。したがって彼らの闘争は民族的、政治的性格が内在していた。個人と組織の差があるだろうが、在日朝鮮人の文化は闘争的、生活的な姿を帯びている。

戦前の在日朝鮮人の文化は「民族」「共生」「同和」という概念の中で見ると、「民族」「同和」的な要素が重疊されていた。支配と被支配の文化的様相が個別的に活動空間で表れたというよりは混在していた。したがって徹底した闘争的文化と多様な日本文化が在日朝鮮人に表れ、それが出会う空間がまさに在日朝鮮人社会であった。そしてそのひとつが朝鮮村であった。‘抵抗的文化空間’でありながら、同時に日本社会すなわち朝鮮村の外へ出て行く準備空間としての役割をしていた場所が朝鮮村であった。ここを通して朝鮮人は文化の追突の初めての経験をして、闘争的文化を創出した。

この闘争的文化は反日の文化として在日朝鮮人社会の生を主導した。勿論、その内容においては活動家たちの地位によって多様な現象が現れたが、日本政府の注目の対象になった。特に反日的な闘争文化は生活と文化、芸術全般に渡って大きな影響を与えた。時期的には1920年代中盤から30年代初めまでが最も大きな影響力を発揮し、政治的在日朝鮮人文化と大衆的文化を支配した。

注

- 1 山中速人、「在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティ形成と複合文化状況」、『在日朝鮮人史研究』(16)、1986年、98頁
- 2 各種資料と先行研究については外村大、金仁徳の研究史整理の文章を参照。(外村大、「在日朝鮮人史研究の現状と課題についての一考察—戦前期を対象とする研究を中心に—」、『在日朝鮮人史研究』(25)、1995年9月、金仁徳、「日本地域の独立運動に関する研究の回顧と展望」、『韓国史論』(26)、1996)
- 3 朝鮮総督府、「阪神・京浜地方の朝鮮人労働者」(大正13年7月)、朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成』(1)、三一書房、1975年、411頁
- 4 大阪地方職業紹介事務局、「朝鮮人労働者調査」(1930年)、朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成』(2)、三一書房、1975年、1178頁
- 5 中央職業紹介事務局、「東京府下在留朝鮮人労働者二関スル調査」(大正13年)、朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成』(1)、三一書房、1975年、439頁
- 6 司法省刑事局、「朝鮮人問題」(昭和3年)、朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成』(1)、三一書房、1975年、251頁
- 7 神戸市役所社会科、「在神半島民族の現状」(昭和2年9月)、朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成』(1)、三一書房、1975年、606頁
- 8 金仁徳、「植民地時代 在日朝鮮人運動 研究」、国学資料院、1996年、43~46頁
- 9 外村大、「在日朝鮮人社会の歴史学的研究」、早稲田大学博士論文、89頁
- 10 高権三、「大阪と半島人」、東光商会、1938年、参照
- 11 外村大、「在日朝鮮人社会の歴史学的研究」、早稲田大学博士論文、227頁
- 12 福岡地方職業紹介事務局、「管内在住朝鮮人労働事情」(1929年)、朴慶植編、『朝鮮人関係資料集成』(2)、三一書房、1975年、1111頁
- 13 特に1920、30年代の在日朝鮮人の演劇運動は次の論文が概観している。(仁木愛子、「1920-30年代の演劇運動」、『在日朝鮮人史研究』(12)、1983年)
- 14 朴慶植、『在日朝鮮人運動史』、三一書房、1979年、138頁
- 15 巡回公演は朝鮮内と日本内で展開された。本稿では日本内の公演に注目する。
- 16 李北満、「朝鮮労働者慰安会の記」、『プロレタリア芸術』、1927年12月、52頁
- 17 このような姿は多数の演劇公演でも見ることができた。(崔丙漢、「労働者慰安会雑感」、『芸術運動』、1927年11月、56-57頁)
- 18 金無敵、「プロレタリア劇場の公演を見て」、『芸術運動』、1927年11月56-57頁
- 19 イ・ビョンチャン、「移動劇場」、『無産者』、1929年5月、参照
- 20 朴慶植、『在日朝鮮人運動史』、三一書房、1979年、140頁
- 21 「朝鮮人の共産主義運動」、金正明編、『朝鮮独立運動』(4)、1054頁、一方、傘下に専門劇団として無産者劇場があったが、特に変わった成果がなかった。(梁汪容他、「日帝占有期 在日韓国人の文学活動と文学意識研究」、釜山大学校出版部、1998年、227頁)

- 22 金仁徳、『植民地時代在日朝鮮人運動研究』、国学資料院、1996年、261頁
- 23 金仁徳、「朝鮮共産党再建闘争協議会 日本出版部の組織と活動」、「韓日民族問題研究」(3)、2003年、44頁、参照
- 24 詳しい内容は次の文章を参照(シン・コソン、「在日本朝鮮労働者演劇運動」、「演劇運動」、1932年5月)
- 25 朴明用、『韓国プロレタリア文学研究』、クルボッサ、1992年、233頁、KORFは綱領として「植民地属領で帝国主義の文化支配反対、民族文化の自由」を掲げ、在日朝鮮人の文化人たちはKORF傘下の日本プロレタリア芸術同盟(プロト)、日本プロレタリア美術家同盟(ヤップ)、日本プロレタリア作家同盟(ナップ)、日本プロレタリア映画同盟(プロキノ)に加入して活動した。
- 26 朴慶植、『在日朝鮮人運動史』、三一書房、1979年、276-277頁
- 27 勿論、それ以前から各種、演劇団体の動きがあり、築地小劇場、新築地劇団、築地座、新協劇団、文学座等を中心とする日本舞台にホン・ヘソン、アン・ヨンイル、チュ・ヨンソプ等が荷担して新劇の訓練を受けた。特にチュ・ヨンソプは1934年6月24日、東京学生芸術座を創立して、在日朝鮮人の演劇運動を主導した。(梁汪容他、『日帝占有期 在日韓国人の文学活動と文学意識の研究』、釜山大学校出版部、1998年、216-225頁)
- 28 これと共に、演劇サークルを中心に劇場公演8回、地区公演16回、移動公演数百回を記録した。(チョン・イルゴム、「在東京朝鮮劇団」、「朝鮮日報」1936年5月15日、梁汪容他、『日帝占有期 在日韓国人の文学活動と文学意識の研究』、釜山大学校出版部、1998年、232頁、再引用)
- 29 ポ・ソグ、「3・1劇場と国際演劇10日間」、「朝鮮日報」1933年3月3日、梁汪容他、『日帝占有期 在日韓国人の文学活動と文学意識の研究』、釜山大学校出版部、1998年、233頁、再引用)
- 30 「特高月報」(昭和8年12月)、朴慶植編、『在日朝鮮人資料集成』(2)、三一書房、1975年、858頁
- 31 朴慶植、『在日朝鮮人運動史』、三一書房、1979年、279頁
- 32 姜徹、『在日朝鮮人年表』、雄山閣、1986年、102頁
- 33 この団体は1935年3月16、17日の2日間、東京本所で公演を準備している途中で、「ウチの春香」が上映中止になり、以後はほとんど活動がなかった。(金正明編、『朝鮮独立運動』(4)、560頁)
- 34 チョン・イルゴム、「在東京朝鮮劇団」、「朝鮮日報」1936年5月15日、梁汪容他、『日帝占有期 在日韓国人の文学活動と文学意識の研究』、釜山大学校出版部、1998年、237頁、再引用)
- 35 「朝鮮芸術座創立大公演」(NO.482)(早稲田大学所蔵)、参照
- 36 『朝鮮日報』昭和11年3月1日
- 37 バク・ヨンジョン、「日帝占有期 在日本韓国人の演劇運動の研究」、「韓国劇芸術研究」(3)、1993年、129頁、梁汪容他、『日帝占有期 在日韓国人の文学活動と文学意識の研究』、釜山大学校出版部、1998年、238頁、参照
- 38 1936年時期、在日朝鮮人による芸術団体として演劇団体以外に音楽分野には音楽家協会があった。(金性洙、「在東京朝鮮人の近況」、「生きた新聞」(8)(1-8)、三一書房、昭和11年8月、33頁)
- 39 坪江油二、『朝鮮民族運動秘史』、高麗書林、1968年、398頁
- 40 <綱領> 1. 私たちは日本内に居住する朝鮮人民衆の生活真相と世論を報道する不偏不党の言論機

関としての存立と成長発展を規する。1. 私たちは日本内に居住する朝鮮人民衆の生活改善と文化的向上を促進することを規する。1. 私たちは日本内に居住する朝鮮人民衆の生活圏確立とその養護伸張に投資することを規する。

- 41 外村大、『在日朝鮮人社会の歴史学的研究』、早稲田大学博士論文、184-185頁
- 42 『民衆時報』1935年10月15日 社説
- 43 『民衆時報』1936年1月1日
- 44 金贊打、『在日コリアン百年史』、三五館、1997年、77頁
- 45 金仁徳、『植民地時代朝鮮人運動研究』、国学資料院、1996年、53頁、58-75頁、参照
- 46 金仁徳、『日本地域留学生の2・8運動と3・1運動』、『韓国独立運動史研究』(13)、1999年、参照
- 47 柳永烈、『1919年2月8日日本留学生の独立宣言』、『在日朝鮮人彼らは誰なのか』、サンイン、2003年、85頁
- 48 金仁徳、『植民地時代朝鮮人運動研究』、国学資料院、1996年、171頁
- 49 金仁徳、『日帝時代民族解放運動家研究』、国学資料院、2002年、24頁
- 50 金仁徳、『学友会の組織と活動』、『国史館論業』(66)、1995年、参照
- 51 金仁徳、『1920年代後半在日朝鮮人記念日闘争』、『史学研究』(62)、2001年、参照
- 52 特に1930年の記念日闘争は次の資料参照（『特高月報』（昭和5年3、5、8、9月分）朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成』（2）、三一書房、1975年、220-232頁）
- 53 内務省警保局、『社会運動の状況』（昭和5年）、朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成』（2）、三一書房、1975年、345頁
- 54 主要な記事内容を見ると、「血の3月1日を迎え、労働者諸君に激する」（東京朝鮮労働組合）、「忘れられない3・1独立万歳事件の日」（『無産青年』）、「万歳事件記念日 日鮮労働者提携して共同の敵を打倒しよう」（『第二無産者新聞』）等であった。（『在留朝鮮人ノ運動状況』（昭和5年12月）、59-60頁）
- 55 『大正十五年中ニ於ケル在留朝鮮人ノ状況』、71頁
- 56 金照明、『メーデーを前にして』、『文芸戦線』（4-5）、1927年5月、132頁
- 57 『大正十五年中ニ於ケル在留朝鮮人ノ状況』、71頁
- 58 金照明、『メーデーを前にして』、『文芸戦線』（4-5）、1927年5月、133頁

## Abstract

Cultural Struggle and the Culture of Struggle in the Korea Minority Movement in Japan from the Mid-1920s to the Early 1930s

Korean residents of Japan who descend from colonials who migrated to Japan during the era of Japanese imperial rule have a different history of migration and settlement from other people who have come to Japan from abroad. Korean residents<sup>1</sup> modes of

survival, also, are different, having been created in the course of struggle in the face of discrimination. The story of their culture of struggle has received little attention in the histories produced by their rulers, but there is copious evidence in Japanese police records from which we can begin to reconstruct this story. These records were conceived in the context of the effort by the Japanese authorities to control and “integrate” Korean residents into Japanese society.

What Korean residents of Japan did in the spheres of culture, ethnic-based political movements, and struggle grounded in culture changed what went on in Korea itself in the spheres of cultural and nationalist political movements. Such changes occurred through the medium of cultural reception, and because they were subject to suppressive policies by the authorities, they were not so rapid. Over time, however, things became more diverse and changes in daily life became apparent.

This paper reexamines the culture of struggle of organized groups of Korean residents in Japan who were active in the nationalist movement from the mid-1920s to the early 1930s. I take into consideration recent work on social and cultural history as well as the primary sources that are available to us.